

令和4年度 群馬大学共同教育学部附属特別支援学校 研究実践報告

研究テーマ

子どもが自ら考え、学び合う授業実践（1年次）

～資質・能力の育成に向けた「個別最適な学び」と「協働的な学び」へのアプローチ～

1. 研究の概要

本研究は、特別支援学校における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について、本校としての考え方を示し、それらを授業実践の中で具現化していき、授業づくりの留意点を明らかにすることを旨とした研究である。

今年度は、本研究の初年度に当たり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を授業に取り入れるために、どのようなことに着目する必要があるのかについて検証を行ってきた。具体的には、下記の3つの視点に着目して、授業づくりに取り組んだ。

- ・実態調査表を基に実態を把握（指導の個別化）
- ・子どもの興味や関心、得意なこと、これまでに有効であった支援を取り入れた学習活動（学習の個性化）
- ・子どもの協働的な学びの姿の想定（協働的な学び）

2. 実践

※別ページ参照（小学部：国語科，中学部：数学科，高等部：作業学習）

3. 本年度のまとめ

○成果

- ・実態調査表等を基に実態把握を行い、指導内容を適確に設定することで指導の個別化につなげることができた。
- ・子どもの興味や関心、得意なこと、これまでに有効であった支援を学習活動に取り入れることで積極的に活動に取り組む姿や、自分で必要な方法を選びながら活動する姿が見られるようになり、学習の個性化につなげることができるようになってきた。
- ・教師が協働的な学びの姿を事前に想定し、環境づくりや場面設定をすることで、子ども同士のかかわりが増え、目的を共有して話し合ったり、友達と協力して活動を進めたりするなど協働的な学びの姿も見られるようになってきた。
- ・学習活動の中で話し合ったり、直接やりとりをしたりする姿だけでなく、友達の姿を見てまねる、教師から友達の活動の様子を聞いて試すなど、間接的なやりとりの姿も協働的な学びの初歩的な姿として捉えた。そのことで、様々な学び合いの場面を教師が想定することにつながり、環境構成や支援方法など協働的な学びを学習に取り入れるために必要なことが分かってきた。

○課題

- ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」について、実践の中で見られた子どもの姿と有効であった支援方法や環境構成などを授業づくりの留意点として整理すること。
- ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」についての本校としての考え方を明確にし、共通の理解の基、実践を行う必要があること。

- ・「一体的な充実」を本校としてどのように捉えるのか定義として整理し、実践の中で位置づけていく必要があること。

○今後に向けて

授業づくりを行う上での留意点を明らかにしていくことで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「子どもが自ら考え、学び合う授業実践」に取り組んでいきたい。

「どんなおはなし？みんなでよう！」

小学部 国語科【読むこと】 学習集団 小学部5・6年生6名

○実践の概要

言葉の表す意味や言葉同士のつながりを捉えて文を読んだり、表現の仕方を工夫したりして言葉のリズムを感じながら登場人物になりきって楽しむことをねらいに、物語文『おおきなかぼちゃ』を読み取り、群読する学習活動を行った。

第一次では、これまでに児童が読んだことのある簡単な物語文を扱い、声の強弱や読む速さを変えることに加え、動作化をしたり、リズム良く読んだりするなど、文の意味や登場人物の気持ちに合わせた読み方の工夫を学習した。第二次では、『おおきなかぼちゃ』を題材に、イラストや写真を用いて内容の読み取りをしたり、どのように読むと良いか考えたりした。第三次では、これまでの学習を生かして群読をした。

○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点

- ・実態に応じて文の量や使用する語彙を変えた物語文（『おおきなかぼちゃ』）を用意した。〔個別〕
- ・個々の実態に応じた読み取り方法（イラストや写真で言葉が表す意味の確認、タブレット端末の使用、自作デジ図書の活用、動作化など）で読むことができたようにした。〔個別〕
- ・登場人物になりきって読むための衣装を提示した。〔個別〕
- ・友達の様子を見たり、一人で読んだりすることができる座席の配置にした。〔個別〕〔協働〕
- ・読み取りや音読表現の実態、個々のねらいに応じたグループ分けをした。〔協働〕

○単元の様子

【第一次】

- ・『あいうえおにぎり』の斉読を行った。食べ物の名前に合わせて手拍子をすることで、音節を区切ってはっきり発音したり、「するする」「ぺろっ」となどを動作で表したりしながら読んでいく中で、言葉の意味を捉えつつ、口を大きく動かして読むことができたようになった。また、『だるまさんシリーズ』や『おむすびころりん』をグループに分かれて読んだ。教師と一緒に文の意味を確かめたり、動作化したりする中で、自分から言葉の意味に合わせた動作を提案するなど楽しんで読む様子が見られた。〔個別〕



【第二次】

- ・文の意味内容を捉えて楽しく読むことをねらいとするグループと、気持ちや場面の変化を捉えて読むことをねらいとするグループに分かれ、『おおきなかぼちゃ』の読み取りを行った。少人数のグループに分かれたことで、自分の読み取りに集中したり、個々が読み取った内容の共有がしやすくなり、友達の読み取ったことや動作化を参考にしながら読んだりすることができた。〔個別〕〔協働〕
- ・かぼちゃや衣装を用意することで、登場人物になりきって読むことができたようにした。楽しんで読むことをねらいとするグループのAさんは、コウモリ役となり、授業が始まると自分から羽をつけて準備をしたり、コウモリになりきって口を大きく動かして元気に読んだりする様子が見られた。〔個



別]

- ・読み取りの際には、児童の実態に応じて紙やタブレット端末でワークシートを提示し、イラストを貼っていくことで単語の意味を確かめながら読むことができるようにした。タブレット端末を使用する児童には、プレゼンテーションソフトでワークシートを提示した。機器を使うことが好き



なBさんは、タブレット端末で読み取りをすることで集中して取り組むことができた。また、プレゼンテーションソフト内で範読の音声を再生できるようにしておくことで、音声を繰り返し聞き、単語のまとめ方や読み方を確かめる様子もあった。〔個別〕

- ・単語の意味をイラストで確認した後で、その場面の挿絵として合うものをいくつかの場面絵から選択するようにした。その中で、単語がつながることで1つの場面を表す文になることに気づき、単語同士のつながりに着目して文を読むことができるようになってきた。Cさんは、ワークシートにイラストを貼り付けた後で、デージー図書の音声を聞きながら物語文と貼り付けたイラストが合っているかを指差して確かめながら読む姿が見られた。〔個別〕



- ・個別に読み取った後は、拡大した物語文を提示し、全体でイラストを貼ったり単語に○を付けたりしながら内容を共有した。ワークシート上で、物の名前を赤色、様子や動作を表す言葉を青色、気持ちを表す言葉を黄色で囲んだ。色やイラストを共通のものにすることで、「(自分の読み取りと)一緒だ」と話したり、「ミイラの次はドラキュラだよ」と友達に伝えたりと、読み取りを互いに確認し合う姿が見られた。〔協働〕

【第三次】

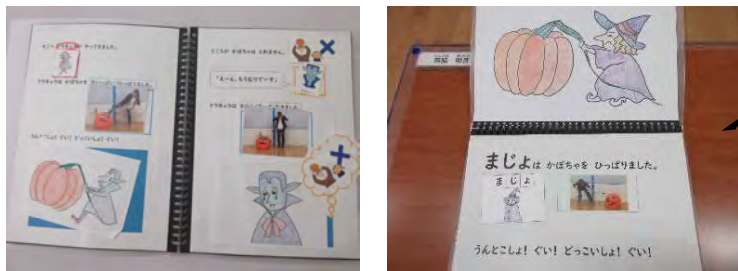
- ・群読では、「大きい声」「小さい声」「はやく」「ゆっくり」など、読み方を決めてから読むようにした。その際、タブレット端末を用いてそれぞれのパターンでの教師の範読を映像や音声で提示し、読み取った内容に合う読み方を選ぶことができるようにした。また、タブレット端末の教材は、共有することができるようにモニターで表示した。「力いっぱいひっぱりました。うんとこしょ！ぐい！どっこいしょ！ぐい！」という場面の読み方を選ぶ際、Cさん、Dさんは「元気な感じがするから」「面白いから」と「大きい声ではやく読む」を選択していた。しかし、隣にいたBさんが繰り返し「大きい声でゆっくり読む」の音声を聞いていることに興味をもち、一緒に繰り返し音声を聞く姿が見られた。それに加えて、音声に合わせて動作化したことで、「引っ張るときはゆっくりだ」と話し、C、Dさんは、「大きい声でゆっくり読む」と読み方を変える姿が見られた。〔協働〕

- ・群読の時間の後半は6名全員で読むようにした。読み取りの共有で使った拡大した物語文を提示しながら読むことで、これまで読み取ったことを音読に生かしたり、別グループの友達の読み方を聞いて自分に取り入れたりする姿が見られた。Bさんは、「こんなもの、とれるわけがない！」と登場人物が怒って言うセリフを読む際、一緒に読んでいた別グループのEさんが地団駄を踏むように足を動かしている姿を見て、同じように足をドンドンと鳴らして怒った様子を表現する姿が見られた。〔協働〕



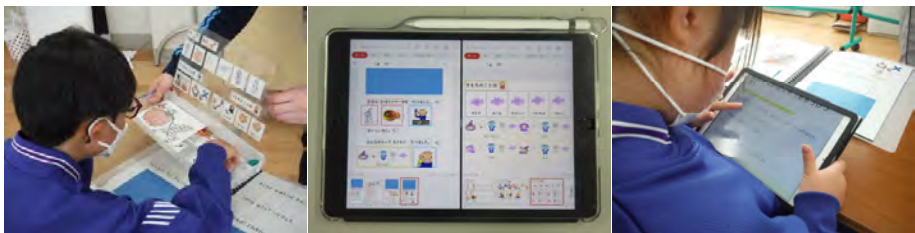
「どんなおはなし？みんなでよう！」
 個々のねらい達成に向けた **個別最適な学び** と **協働的な学び** の工夫

【個々の実態に応じて文を書き替えた読みの教材】



文中の **物の名前** **様子を表す言葉** **気持ちを表す言葉** を統一の色で囲った。

【実態や個々の得意な方法に応じた読み取り方法の工夫】

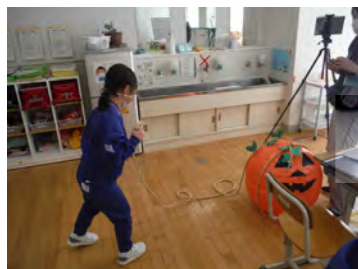


イラストや写真を用いて タブレット端末で デイジー図書を用いて

【登場人物になりきって読み取る】



衣装を選び、着て読む



動作化

【読み取りの共有】



拡大した文



モニターで教材を共有する



動作化する



互いの音読を聞く



読んでいる動画を見る

「くらべよう はかろう～ふとく宅配便～」

中学部 数学科【測定】 学習集団 中学部2年生6名

○実践の概要

計器の傾きから軽重を判断したり，重さを数値で表したりすることをねらいに，色々な荷物の重さをシーソー型の天秤や大型上皿天秤，分銅，上皿秤などで比較・測定した。

第一次では，軽重差のある荷物を持ち比べて重さを体感し，「重い」「軽い」という言葉を生徒全員で共有した。第二次以降からは，個々の目標に応じた計器を使って荷物の重さを比べたり，測定して数値で表したりした。

○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点

- ・使用する荷物の重さは，生徒の指導内容に応じて0.1kg～3kgの重さを，「0.1kgと2kgの比較」，「2kgと2.1kgの比較」のように設定することで，計器に載せたときにはっきりとした違いを見て自分で判断したり，微妙な重さの違いに着目して予想を立てたりすることができるようにした。〔個別〕
- ・導入段階で，生徒が一人ずつ天秤棒に荷物を載せて持つ体験をすることで，「重い」と感じたものの方に天秤が傾く様子から，「重いもの＝下に下がる」ということを体感して捉えられるようにした。〔個別〕
- ・個々の認知の特性を踏まえて，傾きを捉えやすいような大型の計器を用意するとともに，比較・測定結果を表現する方法を個別化（重いものを教師に渡そうとする動き，指差しでの選択，「重い／軽い」という言葉，図で表す・数値で表す）した。〔個別〕
- ・段階や指導内容が同じ，もしくは近い生徒をペアにし，計器を共有してやり方を確かめ合いながら比較・測定するようにした。また，段階や指導内容の異なる生徒同士でも，互いに比較・測定方法を見合ったり，計器や支援具を共有したりできる環境を設定し，友達のやり方に興味をもって試すことができるようにした。〔協働〕
- ・荷物を正しく比較・測定できたのか確かめる装置として2kg以上の重さで動くロープウェイや，2kgより重くなると沈む船を用意し，重さによって「ロープウェイが動くか」「船が沈まないか」を友達と見合えるようにした。こうすることで，「（基準より）重かったから船が沈んだね」のように考えたことを伝え合ったり，友達と一緒に測定し直すなどして正確な量り方を確かめ合ったりすることができるようにした。〔協働〕
- ・2つのものを比べた際には，「下がった方が重い」という言葉を合い言葉にすることで，生徒が他の生徒の比較・測定結果を見ても，自分の学習を活かして重いものを判断できるようにした。〔協働〕



○単元の様子

- ・導入段階では，全員で10kg以上ある段ボールや空箱を持って比べることで，「重い」「軽い」と体感した重さを言葉で伝えたり，重い荷物を友達と一緒に持とうとしたりする姿が見られた。また，天秤棒に荷物を載せた様子を見合うことで，下がっている方を指差しながら「こっちが重い」と重い方を選ぶ姿が見られるようになった。〔協働〕



- 展開段階からは、シーソー型の天秤ペア、大型上皿天秤ペア、任意単位・計器ペアに分かれて荷物の重さを比較・測定した。2つのものの重さを比べた際、どちらが重いのか判断に迷ったAさんが、隣で別の計器を使用し「こっちの方が下がっているから重いな」と呟いたBさんの様子を見て、自分の上皿天秤でも下がっている方を指差し、「(重いのは) こっちだ」と判断する姿が見られた。〔協働〕



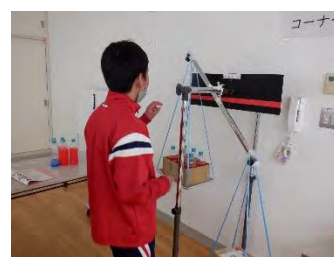
- 荷物の重さを表す際には、個々に合わせた方法を取り入れた。例えば、Cさんが任意単位（赤：500 g，青：100 g のペットボトル分銅）で重さを比べていた際には、はじめ「赤3本分」「赤2本と青1本分」のように数値だけで表した重さを捉えることは難しかった。そこで、日頃足し算をする際に使っている数値をドット化して数える方法を取り入れ、分銅の数をドット図で表すワークシートを用意した。こうすることで、ドットの数を見比べながら「①の荷物は赤5本分の重さだ」「船に載せられる赤4本分の重さより重いから、ロープウェイで運ぼう」のように、正しく表すことができるようになった。〔個別〕

荷物	① 目盛り 読みかき	② 目盛り 読みかき	目盛り
1			目盛り
2			目盛り
3			目盛り
4			目盛り
5			目盛り

- ロープウェイや船を使って、荷物を正しく量れたかを確認した際、Dさんが量った荷物が積載上限よりも重く、船が沈んだ様子を見ると、Eさんは荷物を上皿秤に載せて再度量り直し、「これは(積載上限の) 2 kg を超えているからロープウェイで運ぼう」と伝えるなど、友達同士で結果から考え直す姿が見られるようになった。〔協働〕



- 単元の後半には、自分以外のペアの計器にも興味をもつようになった。シーソー型の天秤の傾きから「重い・軽い」を判断する学習をしていたFさんが、大型上皿天秤と任意単位に分銅を使用しているペアのところに行き、上皿天秤に分銅を載せて傾きを見るようになった。また、Cさんが、天秤の両皿が釣り合うように分銅の個数を調整する姿を見ると、FさんもCさんをまねて、両皿に同じ個数ずつ分銅を載せて試すようになった。〔協働〕



- 生徒が日頃から数量をどのように捉え、どんなやり方で判断するのが得意なのかを基にして、計器やワークシートなどの支援具を用意することで、生徒が自分から計器を扱い、考えたことを表そうとする姿が見られるようになった。また、一人一人の生徒が重さの違いを捉えたときの動きや言葉などを想定し、教師間で共有しておくことで、「一緒に持って『重いね』と共感する」「天秤を正面から見て下がっている方を尋ねる」など、生徒の指導内容に応じた支援をすることができた。〔個別〕

- 実態差の大きい学習集団でも、全員で共有できる合言葉を使ったり、教材や支援具を見合いながら使用できるようにすることで、友達のやり方を試したり、違うやり方でも同じ結果になるのかを確認したりすることができた。〔協働〕

中学部

「くらべよう はかろう～ふとく宅配便～」
個々のねらい達成に向けた **個別最適な学び** と **協働的な学び** の工夫

【個々の数量の認知の特性と目標に合わせた教材】



シーソー型の上皿天秤



大型上皿天秤



任意単位とした分銅

【友達と確かめ合いながら活動できる環境】



基準の重さよりも
荷物が重いと動くロープウェイ



基準の重さよりも
荷物が軽いと浮かぶ船

生徒の興味のある物を取り入れ、
個別に重さを設定した荷物



【全員に共通する重さの捉え方】
「下がった方が重い」



傾きを見やすくする
ために印を付けた天秤



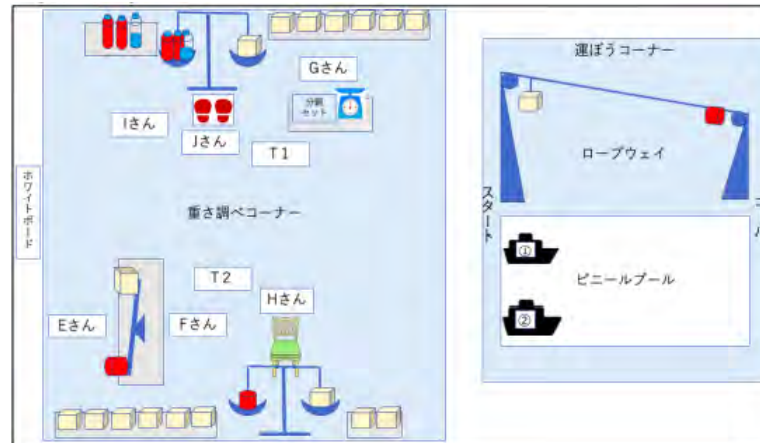
<table border="1"> <tr><th>物</th><th>重さ</th><th>目印</th></tr> <tr><td>①</td><td>100g</td><td>○</td></tr> <tr><td>②</td><td>200g</td><td>○</td></tr> <tr><td>③</td><td>300g</td><td>○</td></tr> <tr><td>④</td><td>400g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑤</td><td>500g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑥</td><td>600g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑦</td><td>700g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑧</td><td>800g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑨</td><td>900g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑩</td><td>1000g</td><td>○</td></tr> </table>	物	重さ	目印	①	100g	○	②	200g	○	③	300g	○	④	400g	○	⑤	500g	○	⑥	600g	○	⑦	700g	○	⑧	800g	○	⑨	900g	○	⑩	1000g	○	<table border="1"> <tr><th>物</th><th>重さ</th><th>目印</th></tr> <tr><td>①</td><td>100g</td><td>○</td></tr> <tr><td>②</td><td>200g</td><td>○</td></tr> <tr><td>③</td><td>300g</td><td>○</td></tr> <tr><td>④</td><td>400g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑤</td><td>500g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑥</td><td>600g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑦</td><td>700g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑧</td><td>800g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑨</td><td>900g</td><td>○</td></tr> <tr><td>⑩</td><td>1000g</td><td>○</td></tr> </table>	物	重さ	目印	①	100g	○	②	200g	○	③	300g	○	④	400g	○	⑤	500g	○	⑥	600g	○	⑦	700g	○	⑧	800g	○	⑨	900g	○	⑩	1000g	○
物	重さ	目印																																																																	
①	100g	○																																																																	
②	200g	○																																																																	
③	300g	○																																																																	
④	400g	○																																																																	
⑤	500g	○																																																																	
⑥	600g	○																																																																	
⑦	700g	○																																																																	
⑧	800g	○																																																																	
⑨	900g	○																																																																	
⑩	1000g	○																																																																	
物	重さ	目印																																																																	
①	100g	○																																																																	
②	200g	○																																																																	
③	300g	○																																																																	
④	400g	○																																																																	
⑤	500g	○																																																																	
⑥	600g	○																																																																	
⑦	700g	○																																																																	
⑧	800g	○																																																																	
⑨	900g	○																																																																	
⑩	1000g	○																																																																	

【図】

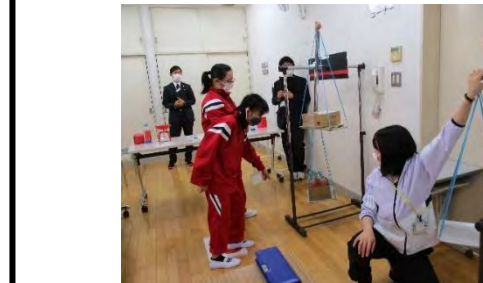
【二択】

【単位】

得意な方法に応じて個別化した
ワークシート



友達の様子を見ながら活動できる環境構成



計器を正面から見る
ための足形や椅子

「新製品の規格づくり～冬のハーバリウム～」

高等部 作業学習【農園芸班】 学習集団 高等部1・2・3年生6名

○実践の概要

販売に向け、自分たちで試作品を評価しながら、テーマに沿った新製品の規格を作ることをねらいに、冬をテーマにしたハーバリウムの試作品作りに取り組んだ。

第一次では、販売に向けてハーバリウムを作る際の留意点をお店の人から聞き、班の全員で共有した。第二次では、テーマに沿った色や形を参考に、生徒自身が資材やビンを選び、資材の数や配置を考えながら試作品作りをした。また、評価表を基に、テーマに沿った色や形になっているか、花材の量や向きが適切かを話し合い、新製品の候補を決めた。第三次では、他の作業班の生徒や教師の意見を聞いて、新製品の規格を決めた。

○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点

- ・資材を乗せるトレイに、個に応じてテーマの写真や花材の見本などの評価基準を貼ることで、テーマに沿った色や形の資材を選ぶことができるようにした。〔個別〕
- ・個々の実態に応じた色や向きについての評価基準の支援具を提示することで、客観的に試作品を評価できるようにした。〔個別〕
- ・話し合い活動における個々の実態や、日常生活の中での交友関係を基に2つのグループに分けることで、友達の試作品の工夫をまねたり、友達からの意見を取り入れたりできるようにした。〔協働〕
- ・グループや個々の実態に応じて、評価する項目の数や内容（色や向きなど）を自分たちで評価し合えるように精選した。〔個別〕〔協働〕
- ・お互いの試作品を評価した理由を発表する機会を設け、友達と意見交換をし合うことで販売に向け、試作品を客観的に見ることができるようになった。〔協働〕

○単元の様子

【第一次】

- ・お店の人から、季節の行事に合わせて色や花材を選んでいると留意点を聞くことで、販売の時期に合わせて、「クリスマスやお正月のハーバリウムを作ろう」と新製品のテーマについて話す生徒の姿があった。〔協働〕

【第二次】

- ・始めは、自分の好きな色を選んで、試作品を作る姿が見られた。個々の実態に合わせた色や向きなどの評価基準を示したトレイを使用する中で、「(かすみ草をまとめて入れると)雪のように見える」と話し、かすみ草を色ごとに束にしてからビンに入れる生徒や、「門松の下に茶色があるから、カラマツを入れる」と、テーマの色と資材の色を見てテーマに合うように色や資材、配置を工夫する姿が見られた。〔個別〕



- ・話し合いでは、始めは、「〇でいいと思います。」と伝える姿があったが、話し合いが進むにつれて、「千日紅の向きが違います」「かすみ草の茎が見えない方がよいです」「気泡があります」など客観的に評価し合う姿が見られるようになった。友達の試作品を評価したり、友達から評価されたりすることで、形や色をよく見て選ぶ姿や、「カラマツの向きをこっち（正面）に直したいです」と出来栄を確かめて、教師に直してほしいと依頼する姿が見られるようになった。〔協働〕



「新製品の規格づくり～冬のハーバリウム～」
 個々のねらい達成に向けた **個別最適な学び** と **協働的な学び** の工夫

詳細のポイント

色	よい		よい
	○	△	△
色	4つの色がついている	3つの色がついている	2つの色が入っている
形	五角△がついていない	五角△がついていない	五角△がついていない
ひば	ひばがついている	えんすいのびんをつけている	ひばやえんすいのびんをつけていない

ざんぶに「よい○」または、「とてもよい△」がついたら、製品の候補に合格です!

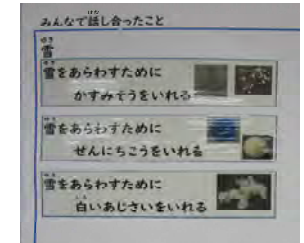
個々の実態に応じた色や向きについての評価規準

話し合いのめあて

- さんのはさくらについて、ほめるいます。
- さん、さくら以外の色をおしえてください。
- いろいろについて、えんすいはありますか、みなさん、このひばはいいですか。
- えんすいについて、えんすいはありますか、みなさん、このひばはいいですか。
- では、○○さんのはさくら以外の色、えんすいのひばはありますか。

つぎにせいひんについてです。

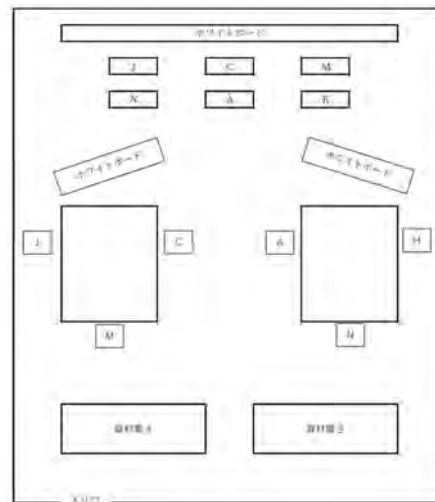
- はさくらについて、えんすいはありますか、みなさん、このひばはいいですか。
- はさくらについて、えんすいはありますか、みなさん、このひばはいいですか。
- はさくらについて、ほめるはさくら、みなさん、このひばはいいですか。



話し合って決めた共有事項

自分たちで話し合い活動を進めるための進行表

お互いの評価や理由を書き込み、共有するための評価表



【めくり式】

【写真】

生徒の得意なことやこれまで有効だった支援を取り入れた試作品を評価するための支援具

【色】